【無料配布】短編ミステリ　～文学フリマ東京43書き下ろし～

親友のアキラ

作：庵字（あんじ）（新生ミステリ研究会会長）

「相談したいことがある」とヒロミに呼び出された。放課後、待ち合わせ場所の校舎裏に行くと、すでに待っていたヒロミが開口一番、

「人を殺すと……罪になるよね」

「……そうだね」と答えるしかない。「ヒロミ、もしかして、誰かを……？」

「――ああ、いや」とんでもない、というふうに手を振りながらヒロミは、「そういうことじゃないんだ」

それを聞いて胸をなで下ろすとともに、それはそうだろうとも思った。ヒロミはクラスでも極めて大人しい、虫も殺せないような人間だ。

「でもね……そういうことじゃなくもないというか……」逡巡するように視線を左右に巡らせてから、ヒロミは真っ直ぐに正面を向いて、「〝人が死ぬ〟って、どういう結果のことを言うんだろう？　例えばさ、体は無事だけれど、自我が完全に消え去った人がいたとして、その状態を〝死んだ〟と言えるのかな？」

「いわゆる植物状態みたいなこと？」

「近いかもしれないけれど……ちょっと違うかな……。とにかく、ある人の自我が消失したものと思ってほしい。自我の消失、イコール、死、と考えていいものなのかな？」

「哲学的な思考実験とか禅問答の類い？　そもそも、きみの言う〝自我の消失〟っていうのがよく分からないな……」

「うーん……。それじゃあさ、物的な体を介することなく、意識だけで意思の疎通を行える存在がいるとして、そういう存在の意識――つまり自我が消失してしまうことは、その意識にとって〝死〟と言えるんだろうか」

「……きみはどう思うんだい？」

「……〝死〟と定義していいと思う。だって……もう二度と、その意識、自我とは意思の疎通ができなくなるわけだから……」

そこまで聞いて、さては、と思った。

「……殺してしまった、というわけか。きみが言う〝意識だけの存在〟である誰かのことを」

その言葉をぶつけると、ヒロミは哀しそうな顔をして視線を逸らしてしまった。間違いない。ヒロミは〝アキラ〟のことを言っているのだ。

〝アキラ〟とは〝イマジナリーフレンド〟のことだ。読んで字のごとく〝想像上の友人〟というもので、ヒロミには〝アキラ〟と名付けたイマジナリーフレンドがいる。以前、ヒロミがなにか独り言を呟いているところを目撃したことがあった。盗み聞きする気もなかったのだが、自然と耳に入ってきたその独り言の内容が、明らかに誰かと会話をしている喋り方で、思わず「えっ？」と声を出してしまった。それでヒロミに気づかれて、照れくさそうに打ち明けられたのだ。ヒロミと〝アキラ〟は幼い頃からの〝親友〟なのだという。

つまり、ヒロミの中から〝アキラ〟が消え去ったというだけのことなのだ。イマジナリーフレンドは成長とともに自然消滅するのが普通だという。ほとんどの人は、特段意識することもなくイマジナリーフレンドと別れていくものなのだろうだが、ヒロミにとってのそれ――イマジナリーフレンドの消失――は〝死〟という形で意識されたということなのだろう。それほどまでにヒロミと〝アキラ〟の関係は深いものとなっていたのだ。どういう経緯でそうなったのかまでは分からないが、イマジナリーフレンド相手とはいえ、たまにはケンカをすることもあるだろう。〝アキラ〟のことを――それこそ実在する人間であるかのように――強烈にイメージしていたヒロミにとっては、そんなことが起きてもおかしくはないと思う。ヒロミは想像の中で〝アキラ〟を殺してしまったのだ。想像上のナイフで刺したのか、はたまた首を絞めたのか。殴り殺す、というのはヒロミのイメージに合わないな、などと余計なことを考えた。

「事情は分かったよ」なるべくやさしい口調を心がけ、「でも、そんなに気に病む必要もないよ。きみはもう〝アキラ〟を必要としなくなったというだけ――」

と、そこでヒロミは、言葉を遮って、

「ああ、ごめん、勘違いさせてしまったみたいだ。僕が……アキラだ」

（了）

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」き―05～06に、ぜひまたお越しください！